様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：２４５０６
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１７４９８

研究課題名（和文）造血細胞移植中の食事摂取困難を緩和する患者参加型看護ケアプログラムの開発

研究課題名（英文）Development of patient-participatory nursing program to ease dietary intake difficulties during hematopoietic stem cell transplantation

研究代表者
脇口　優希（wakiguchi, yuki）

兵庫県立大学・看護学部・助教

研究者番号：９０５２０９８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、造血幹細胞移植患者が体験する食事摂取困難について、患者自身の主観的体験を元に看護ケアプログラムを開発することである。研究は①患者の主観的体験を元にした状況特定理論の開発、②医療者らが実施している介入・ケアの調査、③①と②を統合し開発した看護ケアプログラムについて患者らから意見をもらい洗練するという３段階構成の予定であった。①②はその成果を学会等で公表している。③はCOVID-19の影響があり予定していた患者会でのエキスパートパネルが実施できなかった。今後の情勢に合わせて引き続き研究を続けたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義
造血幹細胞移植患者の食事摂取困難について、欧米ではガイドラインが作成されているが日本ではまだ統一見解がない。過去の調査では身体症状のマネジメントや栄養学的な介入が中心である。しかし、いずれも共通して「患者の個別性に寄り添ったケアが必要」と指摘されているにも関わらず、そこを明らかにした研究はなかった。
本研究では患者の主観的体験に対応する看護ケアを検討したことにより、身体的要因だけでなく心理社会的要因による食事摂取困難への看護介入を提案することができた。また、これまで見過ごされてきた生着後の食事摂取困難についても、そのメカニズムに合わせた回復への支援を提供できる可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a nursing care program based on patients' subjective experiences of food intake difficulties experienced by hematopoietic stem cell transplant patients. The research was planned to be conducted in three phases: (1) development of a situation-specific theory based on patients' subjective experiences, (2) investigation of interventions and care provided by health care providers, and (3) refinement of the nursing care program developed by integrating (1) and (2) after obtaining feedback from patients. The results of (1) and (2) were published at academic conferences. In (3), due to the impact of COVID-19, we were unable to hold the planned expert panel meeting at a patients' association. We would like to continue our research in accordance with the future situation.

研究分野：がん看護

キーワード：造血幹細胞移植看護　食事摂取困難　看護介入プログラム　患者参加型

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

造血細胞移植後の食事摂取困難は、多彩かつ強烈な身体症状（食欲不振、嘔気・嘔吐、唾液分泌減少、味覚変化、粘膜炎など）と患者の心理社会的要因などが影響しあった結果として体験される個別性、多様性に富んだ複雑な体験である。また、食事摂取困難によって体重、骨格筋量、体脂肪量のすべてが減少し、標準体重の 95%未満の患者は移植後 150 日以内の死亡リスクが上昇することが明らかになっており、医学界では造血細胞移植中の有効な介入について調査が急速に進んでいる。具体的には、高カロリー輸液の予防的投与、至適カロリー量の推奨、経口摂取の必要性等について論じられている（Arends, et al. 2006, Morishita, et al. 2016）。しかし、食事量を維持する有効な対策については統一された見解や基準がなく、医師の裁量に任されている。また、退院後の患者の生活を支える長期フォローアップ(LTFU)外来においても、食事摂取困難や関連する有害事象は課題となっているものの有効な看護介入の手立ては無い（石田ら, 2005）。

このように有効な介入が確立できない要因の一つに、食事摂取困難をもたらす身体症状だけではなく、個別性の高い心理社会的要因が複雑に影響しているという特徴が挙げられる。「食べたいけれど体が受け付けない」という患者も多く、その様相を明らかにするため、申請者は造血細胞移植後患者の食事摂取困難に関して患者の主観的世界に焦点を当てて調査を行った。その結果、以下のことが明らかになった。①患者は記憶が曖昧になるほどの強烈な身体症状に伴って判断力や思考力が低下していた、②過去の治療経験を基に高カロリー輸液に全面的に頼って苦痛を回避する方略をとる者や、反対に試行錯誤を繰り返して食事摂取に挑戦する者がみられた、③患者は過去の治療経験や「食」に対するこだわり、身体感覚等の影響を受けて、それぞれ自己流の方略を展開していた。このように多彩な患者の体験世界について医療従事者が知る機会は少なく、当然のことながら療養支援に活かされることも稀である。

本研究課題の核心をなす問いは、食事摂取困難という現象に対して「患者はどのような体験をしているか」また、「真の意味で患者の役に立つケアとは何か」というものである。これらの問いを明らかにするため、症状体験を構成する要素を調査する。その結果を基にして、患者と協働しながら身体的な側面だけでなく心理社会的な要因も含めて包括的に食事摂取困難への看護援助の在り方を包括的かつ多角的に探索する。

２．研究の目的

本研究の目的は、造血細胞移植を受ける患者の食事摂取困難に関与する心理社会的や要因を明らかにして、有効な看護介入モデルを開発し、患者エキスパートパネルによってより実用性の高い当事者参加型ケアプログラムに精錬させることである。

３．研究の方法

当初は、①診療録情報のデータ解析による看護介入プログラムの開発、②当事者らのエキスパートパネルによる看護介入プログラムの精錬を予定していた。

(1). 看護介入プログラムの開発

過去に申請者が行った造血細胞移植患者を対象とした調査を基盤として、看護介入モデルの開発のため造血細胞移植後患者の診療録情報から食事摂取困難に影響を与える要因について retrospective に情報収集を行い、食事摂取困難に関連する量的・質的データを分析する予定にしていた。しかし、現実的には施設間で食事摂取困難に関して記録して

いる情報に差が大きいこと、電子カルテの様式が異なるため統一した情報収集ができないことが明らかになり計画を修正した。

修正後は、①看護介入プログラムの基盤となる状況特定理論の開発、②医療者らが実際に行っている介入に関する調査、を行い看護介入プログラムの基盤を整えた。研究方法は以下の通りである。

① 状況特定理論の開発（2018～2020 年度）

中範囲理論である症状マネジメントモデル（以下 MSM）に基づいて実施した移植患者の食事摂取困難に関する調査に加えて、移植患者の食事摂取困難に関する文献レビューを追加することで、状況特定理論の開発を行った。

文献レビューは、造血細胞移植患者の食事摂取に関する国内外の日本語と英語の看護文献を収集した。医中誌、Pubmed、CINAHL を用いて、キーワードは「移植・食事・経口摂取」「trasnplant・oral intake」で、単独もしくは組み合わせて、2009 年～2019 年 7 月に発表された原著論文を検索した。検索された論文のうち重複文献、臓器移植に関する文献、小児に関する文献を除外した論文 29 件（日本語 11 件、英語 18 件）を分析対象とした。

② 医療者の介入に関する調査（2019 年度～2021 年度）

国内の移植施設・病棟において 1 年以上勤務している医師・看護師・栄養士を対象にグループインタビューを行った。一部の施設は COVID-19 の影響により調査が延期となっていたが、Web 会議システムを利用したオンラインインタビューに計画を変更した。

(2). 看護介入プログラムの精錬

開発した看護介入プログラムについて、当事者である造血細胞移植経験のある患者によるエキスパートパネルを実施し、モデルの修正を行い、当事者参加型ケアプログラムとして再構成する予定であったが、こちらも COVID-19 の影響による患者会中止などにより、本研究期間内での実施は断念せざるを得なかった。今後、Web 会議システムの活用や感染対策を行ったうえでのエキスパートパネルの在り方を検討し、引き続き患者参加型の看護ケアプログラムの開発に努める。

４．研究成果

(1). 学会発表（3 件）

① 造血細胞移植患者の食事摂取困難の 症状マネジメントに関する文献レビュー、第 33 回日本がん看護学会（2019 年）

② 造血幹細胞移植患者の食事摂取に対する医療者の判断と介入、第 40 回日本看護科学学会（2020 年）

③ 造血細胞移植患者の食事摂取困難に関する症状マネジメントモデルの構築 修正版 A Model of Symptom Management を基盤とした状況特定理論の開発、第 1 回理論看護研究会（2021 年）

(2). 論文投稿（投稿準備中 1 件）

① Symptom management for patients with difficulty eating after hematopoietic stem cell transplantation, Oncology nursing forum（査読あり）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 脇口優希
２．発表標題 造血幹細胞移植患者の食事摂取に対する医療者の判断と介入
３．学会等名 第40回　日本看護科学学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 脇口優希
２．発表標題 造血細胞移植患者の食事摂取困難に関する症状マネジメントモデルの構築 修正版A Model of Symptom Managementを基盤とした状況特定理論の開発
３．学会等名 第1回　理論看護研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 脇口　優希
２．発表標題 造血細胞移植患者の食事摂取困難の 症状マネジメントに関する文献レビュー
３．学会等名 第33回　日本がん看護学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関